

オリーブの島から 小豆島中央病院 上席副院長 林 敬二

この度、へき地医療貢献者として当院中澤亨先生とともに表彰して頂くことになりました。今回の表彰は私個人の名前になってはおりますが 私以前より小豆島で産婦人科診療を継続されてきた諸先生方をはじめ特に助産師を中心とした産婦人科スタッフ 及び 小豆島内の小豆島・土庄両町など行政にかかわるすべてのスタッフに頂いたものと思っております、この場をおかりして関係者の皆様に感謝申し上げます。

私は昭和 62 年に香川医科大学を第 2 期生として卒業した後、神保利春教授の主幹なさる香川医科大学母子科学講座周産(生)期学教室に入局し、以後周産期領域を中心として広く産婦人科医として研鑽を積んでまいりました。当時、香川医大周産期学教室として私は最初の入局者でまた唯一の研修医であったこともあり分娩はもちろん子宮筋腫・卵巣嚢腫などの良性腫瘍の手術などは入局初年度より執刀させていただくなど厳しくも充実した研修をさせて頂いておりました。

その当時小豆島には内海病院・土庄中央病院の二つの公立病院それぞれに産婦人科医が 1 名ずつ 加えて個人医院に 1 名 計 3 名の産婦人科医がおられました。そんななか内海病院の山本先生が体調を崩され中心静脈栄養をなさりながらも診療を続けておられたのですがやむなく産婦人科休診となりました。平成 4 年になり、個人医院を閉院されて井上先生が内海病院に移られ、内海病院産婦人科が再開されました。それにともない月に 1 回 週末のお手伝いに小豆島に来ることになりました。これが私と小豆島での産婦人科診療の関わりはじめてでした。

その当直業務で平成 4 年 6 月 12 日金曜日 18 時いつものように内海病院に到着しました。予定帝切を終えられて井上先生は落ち着いているのでもう帰られたこと。妊娠 36 週 2 日の切迫早産の方が帝切中に来られて今子宮収縮抑制剤の点滴が始まったこと。などの申し送りを受けました。Monitor をみてみるとよく張っており胎児心拍の細変動が少ないことがちょっと気にはなりましたが、用意していただいた宿舎で待機しておりました。夕食をとりしばらくしたところでポケットベルが鳴り病院に電話をしてみると胎児心拍がとりにくいとの連絡を受けました。病院に駆けつけてみると細変動のない胎児心拍が徐々に低下していく Monitor が記録されていました。すぐに産婦人科の超音波装置で確認したのですが画質が悪くてよく見えません。当時院内で一番新しい超音波装置を当日当直していた香川医大同期の循環器内科泉先生が持って来てくれましたが、胎児心拍は確認できませんでした。頻回の子宮収縮 子宮内胎児死亡 胎盤後血腫から 常位胎盤早期剥離をおこしていたのですが、ほんの数時間前、切迫早産でもう少し頑張りましょうと説明を受けていた妊婦さんのところに若造の産婦人科医と名乗るやつが突然やって来て子宮内胎児死亡ですと説明して納得して頂けるのだろうか？しかし早急に分娩を終了するための処置を開始しなければいけないし など勝手に悩んでおりましたが 妊婦さんもご家族も素直に話を受け入れてくださり 一晩かけて分娩誘発ののち翌日死産としました。分娩終了後幸い DIC などに対

する特別な治療も要さず 軽快されていきました。後日この方からお手紙を頂きました。申し訳ないことに私は全く覚えていなかったのですが入局 1 年目に私が卵巣嚢腫の手術を執刀していた方でした。入局 1 年目 大学でのすべての分娩と多い時には産科と婦人科を合わせて入院患者 40 名ほどを担当しほとんどやっつけ仕事のように仕事をこなしていた頃のことでしたが、そのお手紙の中で 私が早剥のお話をした時 先生が担当してくれて良かった。と言ってくださいました。その言葉はお手紙とともに今も心に残っております。

そんな、目にはみえない大きな力が働いていたのか、そして小豆島と特別なご縁があったのか、井上先生後任の河野先生の退職に伴い平成 11(1999)年 9 月より内海病院産婦人科医長として赴任することになりました。赴任して最初の秋 ちょうどこの文章を書いているこの時期ですが小豆島では全島を挙げてお祭りがおこなわれます。スタッフがふと教えてくれた きんもくせいが香ってきたからそろそろ太刀魚が内海湾に入ってくる頃ですよという話を聞いた時に ほんとにいいところに来たもんだな とほっとしたのを覚えています。

小豆島はエンジェルロード・オリーブ・寒霞溪など観光の島として脚光を浴びております。しかし島の人にもあまり知られていないとっておきの秘密もあります。そのひとつに夏至観音があります。夏至観音は洞雲山の岩肌に差し込んだ日陰によって夏至前後の午後 3 時過ぎに浮かび上がるものなのですが、ちょうど梅雨の時期でもありなかなかお目にかかることができません。

小豆島に赴任して 5 年目の夏、大学に講師で帰ってきませんかとお話を頂いたのですが、さも産婦人科でなにかやることがあるように やり残したことがありますのでもうしばらく頑張ってみますと（その実、夏至観音をちゃんと見てみたかっただけだった気もするのですが）お断りした結果、ちょっとしたご縁でかかわっただけのはずだった小豆島に深くかわるることとなりました。

分娩数の減少と相まって大野事件の後、分娩施設の減少の波は小豆島にもおよび、土庄中央病院が産科を休止したあとは内海病院のみが唯一小豆島で分娩を取り扱う施設となりました。そんな小豆島は現在、内海町と池田町が合併した小豆島町と土庄町の 2 町で構成されており両町とも移住などに力を入れてはいますが、本年 7 月時点でその人口は小豆島町 14400 人 土庄町 13610 人 小豆島全体で計 28010 人。高齢化率は両町とも約 40%と少子高齢化の非常に進んだ島となっています。赴任当初はもっとも多い年で年間分娩数 225。年平均 200 分娩あった分娩数ですが、特に昨年は 4 月に小豆島内の公立 2 病院(内海病院/土庄中央病院)の小豆島中央病院への統合移転に伴い里帰りに限って分娩制限させていただいたこともあって 152 分娩にまで減少いたしました。分娩者の住所の内訳は小豆島町・土庄町ともに約 35%で里帰りの方が 30%とこの比率は例年ほぼ一定です。また両町の出生届出数もほぼ当院の分娩数と平行に推移しております。島内で分娩を取り扱う唯一の施設ですので、これから分娩を制限したとしても逆に分娩を増やそうとしてもあまり産婦人科医の拘束される時間には変わりはないのかなとも考えております。

現在、週末には月 2 回ほど香川大学から応援を頂いたり、また帝切など手術時には外科医の協力を得たりしながら 1 人でできる範囲の産婦人科診療を継続いたしております。島だからできない・1人だからできないでは申し訳ありませんので 極力産婦人科医としてできることはやろうと思っており 例えば骨盤位外廻旋・骨盤位牽出術・鉗子遂娩術や帝切後経膈分娩など症例を選んで取り組んできております。しかしガイドライン遵守の現在の診療ではこれらの手技はどうも島外ではあまり行われなくなっているようでちょっと寂しくも感じております。なにはともあれ、この受賞を期に中澤先生ともどもそれぞれの分野でもうしばらく頑張ればと思っています。

